

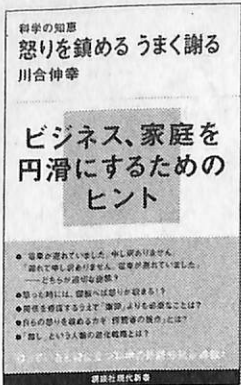


# 著者インタビュー

インターネット上のブログやSNSのコメントに非難が集中する「炎上」、出身国や宗教などを標的とした攻撃的・侮蔑的な発言「ヘイトスピーチ」。身近なところでは、パワハラやケンカ。本書は、現代社会に浮上する「怒り」から個人の感情までを読み解き、その対処法を探る。

「思春期になると『心って、人間って何だろう?』と考え始めたりしますよね。僕もそうだったんですが哲学には長い歴史があって、自分が新しい何かを見つけたのは難しいと思った。そこで当時、まだ生まれて100年そこそこの心理学を選んだんです。この学問なら、自分でも何か発見できるのではと思って」

「ネズミやサルを使った心理学や神経科学の研究を20年以上行い、人間を対象とした認知心理



『怒りを鎮める うまく謝る』  
川合伸幸  
(講談社現代新書/760円)



## 川合伸幸

かわい のぶゆき 1966年、京都府生まれ。名古屋大学院准教授。第6回(2010年)日本学士院・学術奨励賞などを受賞。主な著書に『コワイの認知科学』『ヒトの本性—なぜ殺し、なぜ助け合うのか』など

と感じ入る。半面、生まれ育った京都の地域性を語る時は、悪戯っぽさを覗かせる。

「京都人、ホントに閉鎖的で鼻持ちならん感じですよ。京都から兵庫県西宮の大学まで電車で行ったんですが、武庫川を越えると『ああ、今日も都落ちや……』って(笑)。二条城の横に住んでいる同級生と明石に行った時は『ここじゃ、光源氏泣くよね』『こんな鄙はダメだ』とか言っていました(笑)」

そして、自らも備えている京都人の性向を「ちよっと納得して楽しい」と笑う。『源氏物語』の「明石」を、さりげなく引い

た友人との会話も雅だ。怒りのメカニズムを解析し、効果的な謝罪のあり方を提示しながら、怒りの抑え方にも論は及ぶ。そして最終章では「赦し」について考察する。

「母にこの本を送ったら、タイトルを見て驚いたと言ってます。母からみれば僕は怒りっぽい方らしくて『ようこんなこと言うたなあ』と(笑)。仰せのとおりで、僕個人は怒らないこと、相手を赦すことを完璧にできているとは思いません」

赦すのは、相手のためではなく自分のため。皆がそこに気づき、怒りを収めること、赦すことを少しずつでも積み重ねていけば、何世代か後には社会が変わっているかもしれない。

「60年ほど前、米国の黒人差別は激しかった。でも今はずいぶん改善されています。それも意識の変化の積み重ねによるものでしょう。こうして世界が少しずつ寛容になっていけば……。赦しの考察には、そんな期待が、図らずも込められているのかもしれない」 構成・小出和明

相手を赦すのは  
相手のためではなく自分のため